

# 田中慎弥『ひよこ太陽』

新潮社 本体一五五〇円



## 阿部公彦

だ。私はたまたま田中さんのことを存じあげているが、田中さんと会ったことのない人でも、あ、田中さんがいる、と思うようにできている。

それは必ずしもこの作品が「私小説仕立て」だからではない。むしろ私小説にしてはいろいろところがきちっとしているし、読者への気遣いものぞく。ある種の私小説にあるような、読者と書き手の境界を凶々しく乗りこえ、ぬるぬるとこちらを「あっち側」に引きこむような野蠻さがない。

『ひよこ太陽』の「私」はとても礼儀正しい。私たちがどんなふうにもこの作品を受け止めるべきか心配してくれるし、ときには

助け船さえだしてくる。

ここには社会化された他者としての田中さんがいるのだ。まさに正真正銘の「田中さん」だ。道端で出くわしたり、喫茶店で待ち合わせたり、居酒屋で一緒になってもおかしくないくらいの人間らしい田中さん。

こんなに落ち着いた人間関係を読者との間に築いて書きだすというのはどういうことだろう。田中慎弥の作品はこれまで、例の『共喰い』など、通常の「ぬるぬる」系で書かれたものがいくらでもあった。共感を武器にし、登場人物が遠くに、匂い立つような個性とともに設定されていなければならない。私たちが読者が、下関方面のエキゾチックな磁場へと、身を乗り出していくように仕向ける作品。

これに対し『ひよこ太陽』の田中さんは、そうしたぬるぬるを石鹼で洗い流して

のかを示すような手がかりはほとんどない。

「女に逃げられた」と言えば明らかに演歌の世界だ。そこには酔いがあり、悲しみがあひ、ひいては開き直った自己肯定や感情の噴射がつづく。小説の黄金パターンと言ってもいい。だからこそ、人は「女に逃げられた」とか「男に捨てられた」という物語を飽きもせず繰り返して語ってきた。人間関係の原初的なマグマがそこにはある。

しかし、「逃げられた」と言いながら、田中さんにはそこには踏みこまない。そうすること、共感や情念ときわどく決別するのだ。

加えてもう一つ。母のことがある。江藤淳の『成熟と喪失』でもたっぷり語られているように「母を捨てる」という物語もまた、哀切感と痛みを喚起してきた。しかし、田中さんは母親に対しても非常にきちっとしている。二人で共同でお金を出して上等の霜降り牛肉のすき焼きを食べたりしているのだ。いまだき珍しいほどの孝行息子だ。

ここでも田中さんはきわどく演歌の世界

清算しようとしてもいうように、自分の小説の書き方や、私生活の習慣や、自意識のステップなどを明晰に書き出してみせる。たしかにこれならビジネスライクに仕事ができそうだ。変なもたれかかりもない。甘いもない。

しかし、小説というものはこうした「もたれあい」や「甘え」や「凶々しいぬるぬる」があればこそ走り出すものでもある。

この連作がとにかく殺伐とした「苦しさ」に満ちているのはそのためだ。書けない。進まない。思いつかない。自らに対し、スライクなほどに「もたれあい」や「甘え」を禁じた作家は、ひどく冴え冴えとした目線のみずからの苦境を見つめている。小説が動かない、という苦境だ。

「だいたいあんたはいつもそうやって偉そうよ。だから女の人にも逃げられる。エッセイやなんか、死にたいとを退けている。そうすることで、小説なのに小説になるまいとしている。そんな田中さんが足を踏み入れているのは、「認識の世界」ではないかと私は思う。「食費を削って酒を買うのではない。スーパーに、そしてこの世に酒があり、私は飲んで、眠ることが出来る。酒代の数千円は出費ではない。金額ではない。眠りに代表される生活全般を支える土台であり、私の命をこの世界にたぎ止める重要な紐帯なのだ。」

ここにも酔いはある。「われ発見せり」とでもいうような発見と認識の喜びのようなものが漏れ出している。しかし、それは他者とのもたれあいに旨味を見いだすような酔いとは少しちがう。より厳しく現実の裏側をめくり、そのことを通して世界をもっと知ろうとする発見欲に近い。その結果として、世界に石ころくらいは投げつけるかもしれない、切実な知へのうずきがそこにはある。

小説家はときにこうした箴言的な知に駆られる。その衝動はどこから来るのだろうかといつも思う。今も私は、田中さんのそんな衝動を興味深く見つめている。

か死にかけたとか書くでしょうが。」

「死にたいとは言っていない。」

「同じことでしょうが。ああいう書き方はだいたい偉そうよ。死のうとしたって言えば人が同情してくれるって思ってるんでしょが。自殺した昔の有名な作家の人たちと同じくらい、自分が偉いと思ってるんでしょが。」

母の口からさらっと出てくる「死のうとしたって言えば人が同情してくれるって思ってるんでしょが」という言葉は、この小説をはじめから見据えている冷徹な視線に形を与えたものにはすぎない。それほどにこの作品は「同情」に対して禁欲的なのだ。読者との距離を保ち、礼儀作法を守っている。

田中さんはいったい何がしたいのだろう。

そこで気になるのが、女たちの問題だ。七篇からなるこの連作をつらぬく最大の柱は「女に逃げられた私」という構図だ。しかし、冒頭の「雨」にある程度記述はあるものの、実際にどのように「私」が女に逃げられたのか、何がほんとうに問題だった